

未来志向かつ戦略性に富んだ 中央政府の全体設計を

委員長 **金丸 恭文**

フューチャーアーキテクト
取締役会長

1954年大阪府生まれ。78年神戸大学工学部卒業後、79年TKC入社。ロジック・システムズ・インターナショナル、NTT PC コミュニケーションズ取締役、インフォネクス取締役を経て、89年フューチャーシステムコンサルティングを設立、代表取締役社長に就任。2007年1月経営統合によりフューチャーアーキテクトに社名変更、代表取締役会長に就任、現在に至る。
99年7月経済同友会入会、2000～2003年度幹事、2004年度より副代表幹事。2000年度E-エコノミー委員会副委員長、2001年度電子政府委員会副委員長、2001～2002年度IT政策委員会副委員長、2001～2003年度次代を造る会副委員長、2003年度新規事業創生委員会委員長、2004年度諮問委員会委員長代理、同友会起業フォーラム委員長、2005年度外交・安全保障委員会委員長、2006年度行政改革委員会委員長、2007年度政治委員会委員長。



国家戦略本部を軸に 中央政府の再設計を

20世紀後半以降、日本を取り巻く内外の環境は複雑化しています。こうした状況において、舵取りをする中央政府はどうあるべきか——。それは、過去の延長線ではないというところから議論がスタートしました。

これまでの中央政府は、省庁という縦割りの組織の集合体、いわば、省庁の利益代表の集まりだったわけです。しかし、最優先されるべきは国益です。そこで、バラバラの“縦”と“横”を統合し、国家全体がどうあるべきかを組織横断的に立案・調整する『国家戦略本部』の創設を提言しました。

提言では、役割と機能を再定義した新しい中央政府を、「首相力」を軸にした戦略的な組織であるべ

きだとしましたが、その設計思想は7つのキーワードに集約されます（17～18ページ参照）。

これらのキーワードは将来にわたって陳腐化しないという自負がありますが、なかでも重要なのが「戦略性」です。前提として、目指すべき国家のあり方を国民にわかりやすく提示しなければなりません。その目標に向けて、政府全体が連携・連動した“質の高い戦略と確実な実行”が必要となります。

また、戦略的であるということ、絶対価値向上に加え、相対価値向上にも重きを置くということだと考えています。“GDPが前年比〇%”といった絶対価値の向上は今後も重要ですが、他方では、中国などのように日本よりも高い成長を遂げているグローバルな競争相手がいるわけです。こうした諸外国との比較において、日本はど

副委員長（役職は4月9日現在）

- ・江口 克彦
（PHP総合研究所 取締役社長）
- ・竹川 節男
（健育会 理事長）
- ・富田 哲郎
（東日本旅客鉄道 常務取締役）
- ・富山 和彦
（経営共創基盤 代表取締役CEO）
- ・浜田 宏
（リヴァンプ 代表パートナー）
- ・山元 肇生
（全日本空輸 取締役社長）

委員40名

（インタビューは6月4日に実施）

うなのかという相対価値でも判断していく必要があるでしょう。

PDCAサイクルの確立と 評価至上主義への移行

もうひとつ、ガバナンス機能の強化も忘れてはなりません。内部監査の機能として『PDCAサイクル確立』と『国家戦略本部による予算執行の評価・監視』、外部監査の機能として『参議院における本格的な決算審議の制度化』と『政策・会計デューデリジェンス組織の新設』を提案しました。経済財政諮問会議を司令塔にして予算編成を行い、国家戦略本部が予算執行をきちんと評価し翌年度の予算編成に反映していく、というPDCAサイクルを実現させ、予算至上主義から評価・決算至上主義に変えていかなければなりません。

今回は、新しい中央政府の全体設計について提言しましたが、意見交換を行った政治家や官僚にも評価してもらっています。新しい中央政府のあり方については、政治家や官僚のみならず、経済人や各種専門家の叡智を結集し、国民的議論を深めながら、オールジャパンで取り組んでいくべきではないでしょうか。

※提言は17～18ページに掲載。